

二〇二三年度 同朋大学 一般選抜1期(A方式) 国語 問題用紙

【注意事項】

- 一、 試験開始の合図があるまで、問題用紙は開かないこと。
- 二、 設問 現代文は共通問題である。全員解答すること。
- 三、 設問 現代文と設問 古文は選択問題である。いずれか一方を選択し解答すること。
- 四、 解答は、解答用紙に記入すること。
(設問 ・ 用、または、設問 ・ 用のいずれかを使用する。)
- 五、 「始め」の合図とともに、解答用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入すること。

〈共通問題〉

□ 次の文章は芥川龍之介の小説『煙管』の前半部分である（出題のため一部改変）。これを読んで、後の問いに答えよ。

加州石川郡金沢城の城主、前田齊広は、参勤中、江戸城の本丸へ登城することに、必ず愛用の煙管を持って行った。当時有名な煙管商、住吉屋七兵衛の手に成った、金無垢地に、劍梅鉢の紋ぢらしという、数寄を凝らした煙管である。前田家は、幕府の制度によると、五世、加賀守綱紀以来、大廊下詰で、席次は、世々尾紀水三家の次を占めている。もちろん、(a)ユウフクなことも、当時の大小名の中で、肩を比べる者は、ほとんど、一人もない。だから、その当主たる齊広が、金無垢の煙管を持つということは、むしろ身分相当の装飾品を持つのに過ぎないのである。

しかし齊広は、その煙管を持っていることをはなはだ、得意に感じていた。もつとも断って置くが、彼の得意は決して、煙管そのものを、どんな意味でも、愛翫したからではない。彼はそういう煙管を日常口にし得る彼自身の勢力が、他の諸侯に比して、優越な(b)所以を悦んだのである。つまり、彼は、加州百万石が金無垢の煙管になって、どこへでも、持って行けるのが、得意だった——と言っても差し支えない。

そういう次第だから、A齊広は、登城している間じゅう、ほとんどその煙管を離したことがない。人と話しをしている時はもちろん、独りでいる時でも、彼はそれを(c)カイチユウから出して、Iに口に啣えながら、長崎煙草か何かの匂いの高い煙りを、必ず悠々とくゆらせている。

もちろんこの得意な心もちは、煙管なり、それによって代表される百万石なりを、人に見せびらかすほど、増長慢な性質のものではなかったかも知れない。が、彼自身が見せびらかさないまでも、殿中の注意は、明らかに、その煙

管に集注されている観があった。そうして、その集注されているということを意識するのが齊広にとつては、かなり愉快な感じを与えた。——現に彼には、同席の大名に、あまりお煙管が見事だからちよいと拝見させていたきたいと、言われた後では、のみなれた煙草の煙までがいつもより、一層快く、舌を刺激するような気さえ、したのである。齊広の持つている、金無垢の煙管に、目を驚かした連中の中で、最もそれを話題にすることを好んだのはいわゆる、お坊主の階級である。彼らはよるとさわると、鼻をつき合わせて、この「加賀の煙管」を材料に得意の(d)饒舌を闘わせた。

「さすがは、大名道具だて。」

「同じ道具でも、ああいふ物は、つぶしが利きやす。」

「質に置いたら、何両貸すことかの。」

「貴公じゃあるまいし、誰が質になんぞ、置くものか。」

ざっと、こんな調子である。

するとある日、彼等の五六人が、円い頭をならべて、一服やりながら、例のごとく煙管の噂をしていると、そこへ、偶然、御数寄屋坊主の河内山宗俊(注5)が、やって来た。

「ふんまた煙管か。」

河内山は、一座の坊主を、**II**にかけて、ア空嘯(そらうせ)いた。

「彫といい、地金といい、見事な物さ。銀の煙管さえ持たぬこちとらには見るも目の毒……」

調子にのって弁じていた了哲という坊主が、ふと気がついて見ると、宗俊は、いつの間にか彼の煙草入れをひきよせて、その中から煙草をつめては、悠然と煙を輪にふいている。

「おい、おい、それは貴公の煙草入れじゃないぜ。」

「いいってことよ。」

宗俊は、了哲の方を見むきもせず、また煙草をつめた。そうして、それを吸ってしまうと、生あくびを一つしながら、煙草入れをそこへ放り出して、

「ええ、悪い煙草だ。煙管ごのみが、聞いてあきれるぜ。」

了哲は慌てて、煙草入れをしまった。

「なに、金無垢の煙管なら、それでも、ちよいとのめようというものさ。」

「ふんまた煙管か。」と繰り返して、「そんなに金無垢が有り難けりやなぜお煙管拝領と出かけねえんだ。」

「お煙管拝領？」

「そうよ。」

さすがに、了哲も相手のイ傍（無人）にあきれたらしい。

「いくらお前、わしが欲ばりでも、……せめて、銀でもあれば、格別さ。……とにかく、金無垢だぜ。あの煙管は。」

「知れたことよ。金無垢ならばこそ、貰うんだ。真鍮しんちゆうの駄六注6を拝領に出るやつがどこにある。」

「だが、そいつは少し恐れだて。」

了哲はきれいに剃そった頭を一つたいて（e）キョウシユクキョウシユクしたような身ぶりをした。

「手前が貰おれわざ、己おれが貰う。いいか、あとで羨ましがるなよ。」

河内山はこう言つて、煙管をはたきながら B 肩をゆすつて、せせら笑つた。

それから間もなくのことである。

齊広がいつものように、殿中の一間で煙草をくゆらせていると、西王母を描いた金襖きんぶすまが、静かに開いて、黒手の黄八丈に、黒の紋付きの羽織を着た坊主が一人、恭しく、彼の前へ這はつて出た。顔を上げずにいるので、誰だかまだわからない。——齊広は、何か用ができたのかと思つたので、煙管をはたきながら、ウ 寛濶かんくわくに声をかけた。

「何用じゃ。」

「ええ、宗俊お願いがございまする。」

河内山はこう言つて、ちよいと言葉を切つた。それから、次のことばを言っているうちに、だんだん頭を上げて、しまいには、じつと斉広の顔を見つめ出した。こういう種類の人間のみが持っている、一種の(愛嬌)をたたえながら、蛇が物を狙うような目で見つめたのである。

「別儀でもございませませんが、その御手元にございまする御煙管を、手前、拝領致しとうございまする。」

斉広は思わず手にしていた煙管を見た。その視線が、煙管へ落ちたのと、河内山が追いかけるように、ことばを次いだのが、ほとんど同時である。

「いかがでございましょう。拝領仰せつけられましょうか。」

宗俊のことばのうちにあるものは(g)コンセイの情ばかりではない、お坊主という階級があらゆる大名に対して持っている、(威嚇)の意もこもっている。煩雑な典故を尚とらんだ、殿中では、天下の侯伯注。も、お坊主の指導に従わなければならぬ。斉広には一方にそういう弱みがあった。それからまた一方には体面上卑吝ひりんの名を取りたくないという心もちがある。しかも、彼にとって金無垢の煙管そのものは、決して得難い品ではない。——この二つの動機が一つになつた時、彼の手はおのずから、Cその煙管を、河内山の前へさし出した。

「おお、とらす。持ってまいれ。」

「有り難うございまする。」

宗俊は、金無垢の煙管をうけとると、(恭)しく押し頂いて、そこそこ、また西王母の襖の向こうへ、ひき下がった。すると、ひき下がる拍子に、後ろから袖を引いたものがある。ふりかえると、そこには、了哲注。が、うすいものある顔をにやつかせながら、彼の掌の上にある金無垢の煙管をもの欲しそうに、指さしていた。

「こう、見や。」

河内山は、小声でこう言つて、煙管の雁首を、了哲の鼻の先へ、持って行つた。

「とうとう、せしめたな。」

「だから、言わねえことじゃねえ。今になって、羨ましがったって、工後の（ ）だ。」

「今度は、私も拝領と出かけよう。」

「へん、御勝手になせえました。」

河内山は、ちよいと煙管の目方をひいて見て、それから、襖ごしに齊広の方を(j)一瞥しながら、Dまた、肩をゆすつてせせら笑った。

では、煙管をまき上げられた齊広の方は、不快に感じたかということ、必ずしもそうではない。それは、彼が、下城をする際に、いつになく機嫌のよさそうな顔をしているので、供の侍たちが、不思議に思ったというのでも、知れるのである。

E彼は、むしろ、宗俊に煙管をやったことに、一種の満足を感じていた。あるいは、煙管を持っている時よりも、その満足の度は、大きかったかも知れない。

そこで、齊広は、本郷の屋敷へ帰ると、近習の侍に向かって、愉快そうにこう言った。

「煙管は宗俊の坊主にとらせたぞよ。」

これを聞いた家中の者は、齊広の広量なのに驚いた。

注1 劍梅鉢…加賀前田家の紋所。梅の花弁を丸形にし、劍を加えた造形。

注2 大廊下詰…「大廊下」は江戸城本丸の座敷。將軍の親族三家三卿、加賀前田、越前松平などの大名が詰めた。

注3 尾紀水三家…尾張、紀伊、水戸の徳川三家。

注4 お坊主…幕府や諸大名に仕え、剃髪・法衣で茶の湯や給仕などの雑役を勤めた者。

注5 御数寄屋坊主…江戸幕府で茶礼・茶器のことをつかさどった役職。

注6 駄六…「駄六張り」の略。粗末な作りの煙管のこと。注7 典故…先例にもとづく儀礼。しきたり。

注8 侯伯…諸侯。大名。

注9 うすいも…薄い痘痕。あばた

問一 波線部(a)「ユウフク」、(c)「カイチュウ」、(e)「キョウシユク」、(g)「コンセイ」を、それぞれ漢字に直せ。

問二 波線部(b)「所以」、(d)「饒舌」、(f)「愛嬌」、(h)「威嚇」、(i)「恭」、(j)「一瞥」の読みを、ひらがなで答えよ。

問三 空欄Ⅰにあてはまる語として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 臆病
- 2 流暢
- 3 鷹揚
- 4 傲慢
- 5 軽率

問四 空欄Ⅱにあてはまる語として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 尻目
- 2 色目
- 3 目頭
- 4 目鼻
- 5 遠目

問五 二重傍線部ア「空嘯いた」、ウ「寛濶に」は、この場合どのような様子を表しているのか。最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ア「空嘯いた」

- 1 平然と相手をだました
- 2 何気ないふうを装った
- 3 小さな声でつぶやいた
- 4 大声でどなりちらした
- 5 あざけるように笑った

ウ 「寛闊に」

- 1 思いがけない様子で
- 2 煩わしそうな様子で
- 3 あわただしい様子で
- 4 ゆったりした様子で
- 5 相手を気遣う様子で

問六 二重傍線部イ「傍（ ）無人」、エ「後の（ ）」を文脈に適した四字熟語または慣用句にするには、括弧内にそれぞれどのような文字をあてはめればよいか。適切な漢字一文字をそれぞれ答えよ。

問七 傍線部A「齊広は、登城している間じゅう、ほとんどその煙管を離れたことがない」とあるが、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 齊広は数ある装飾品の中でも煙管に特別なこだわりを持っており、この金無垢の煙管は彼が一番気に入っていた品だったから。
- 2 この煙管は当時の有名な煙管商に注文して作らせた貴重な品であり、齊広はそれを他の諸侯にそれとなく自慢したかったから。
- 3 齊広はお坊主たちの間に金無垢の煙管の噂が広がっていることを知っており、さらに彼らの注目を集めたいと思っていたから。
- 4 金無垢の煙管で匂いの高い長崎煙草の煙りをくゆらせることが、齊広にとっては殿中においての唯一のなぐさめであったから。
- 5 齊広にとって金無垢の煙管は加州百万石の勢力を具現化したものであり、それを持つことで自尊心を満たすことができたから。

問八 傍線部B「肩をゆすつて、せせら笑った」とあるが、ここには河内山のどのような心情が表れているか。最も適

当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分を仲間に入れようとしないう哲たちに仕返しをする機会を得たうれしさ。
- 2 金無垢の煙管の噂をするだけでそれを拝領する勇気のない了哲たちへの軽蔑。
- 3 了哲たちに見えを張って恐れ多いことを言ってしまったことへの後悔と不安。
- 4 日ごろからお坊主たちを見下している齊広を見返す機会を得たことへの喜び。
- 5 齊広に目をかけられているからこそ金無垢の煙管を拝領できるという優越感。

問九 傍線部D「また、肩をゆすつてせせら笑った」とあるが、ここには河内山のどのような心情が表れているか。最

も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 齊広を怒らせることなく計画どおりに金無垢の煙管を手にした安堵の気持ち。
- 2 了哲やほかのお坊主たちには絶対にできないことを成し遂げたという達成感。
- 3 お坊主としての非凡な才能を仲間に見せつけることができたことへの自負心。
- 4 口先一つで高価な金無垢の煙管をまんまと自分のものにしたことへの満足感。
- 5 名だたる大名でありながらも自分の思惑のとおりになった齊広へのあざけり。

問十 傍線部C「その煙管を、河内山の前へさし出した」とあるが、齊広がこのようなことをしたのはなぜか。理由と

して適当なものを、次の中から二つ選び、番号で答えよ。

- 1 金無垢だからといって煙管を与えることをしぶり、自分はけちだと周囲から見られなくなかったから。
- 2 有能なお坊主である宗俊を手なずけることで、殿中での自分の立場が今よりもよくなると考えたから。
- 3 宗俊の態度やことばに、大名であつても従わざるを得ない、お坊主が殿中で持つ力を感じとったから。
- 4 煙管をさし出したとしても、宗俊がまさか本当に金無垢の煙管を持ち去ると思っていなかったから。
- 5 お坊主の身分でありながらも、煙管を拝領したいと申し出てきた宗俊の勇気と行動力に感心したから。
- 6 金無垢の煙管を持つことで人々の注意を集めることに、ちょうど嫌気がさしてきていた時だったから。

問十一

傍線部E「彼は、むしろ、宗俊に煙管をやったことに、一種の満足を感じていた」とあるが、この時の斉広の気持ちについて五人の学生が会話をしている。次の1～5の発言の中で、正しく理解しているものを一つ選び、番号で答えよ。

- 1 (学生1)「斉広はきつと、煙管くらいでお坊主たちを自分の味方にできるなら、いずれは殿中での勢力が尾紀水三家を上まわることも夢ではないと考えたのだろうね。」
- 2 (学生2)「私は、このことを本郷の屋敷にいる家臣たちに伝えれば、主君にふさわしい行為として、家臣からの信頼を取りもどすことができる」と信じていたのだと思う。」
- 3 (学生3)「家臣のことなど考えてないよ。斉広は、ただ、お坊主たちの中でも力のある宗俊を恐れていて、ひとまず彼の言うとおりにしてやったことで安堵しているんだよ。」
- 4 (学生4)「みんな違うよ。私は、斉広が加州百万石の主君である重圧にたえられなくて、その象徴である煙管を宗俊に与えたことで、かえって気持ちが悪くなったのだと思う。」
- 5 (学生5)「そうかな。私は、ぜいたくな金無垢の煙管を惜しげもなくお坊主に与えたことで、自分の勢力と心の広さを周囲に誇示できたことに自己満足してるのだと思うけどね。」

問十二

次の1～6の中から、芥川龍之介の作品をすべて選び、番号で答えよ。

- 1 雪国
- 2 地獄変
- 3 斜陽
- 4 鼻
- 5 潮騒
- 6 破戒

〈選択問題〉

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

物語は近代になると急に人気がなくなった。広義には物語に属すると考えられる「小説」の力が強くなり、近代小説は物語より文学的価値があると思われた。物語のような非現実的な話に対して、小説は現実を描写していると主張する。しかし果たしてそうだろうか。

ここで近代と言っても、ヨーロッパ近代というのが正しいだろう。ヨーロッパ近代に起こった文化は極めて強力で、それは全世界を「席捲した」と言っても過言ではない。世界の国々で「近代化」とは、すなわち「欧米化」を意味すると考えられてきたと言えるだろう。ヨーロッパの文化の強さを(a)タンテキに示しているのは、そこに生じてきた科学・技術である。それによって人間は自然をコントロールし、操作することが可能になった。そして、そのような力によって他の国々を支配することも可能と思われた。

帝国主義のモットーとして使われる「divide and rule」（分割して統治せよ）は、少しもじって使うと、そのまま科学の標語にもなるところが面白い。つまり、物事を区別（分類）して、その間の法則を見出して秩序づける、と読み換える。これは近代科学の行っているところである。

このような考えに立つと、「たましい」などは存在しないことになる。近代になってからは、人間は心と体について語るとしても、たましいの方は棄てられてしまった。

自然科学と技術の組み合わせによって、何でも可能ではないかとさえ思われたが、このような考え方に対する反省が最近になって生じてきた。たとえば、医学の領域で多く現われてきた心身症などもその例であろう。はっきりとした身体の症状——たとえば皮膚炎など——が生じるが、その原因を心の方にも体の方にも見出すことができない。事象の因果

的連関を明らかにし、原因をつきとめることによつて一義的な方法で治療するというのは成功しない。心と体の分離を癒やすことは、近代医学の方法ではできない。これは、その方法論から考えても当然のことである。

近代の科学・技術的思考法は人間関係にも持ちこまれて混乱を生ぜしめているように思う。たとえば老人に対して。老人を一般人から切り離された「対象」として、それをどのような方法によつて操作するのが一番便利か、という考えに立つて老人対策とやらを考えていないだろうか。これは老人にとつてはまったくやり切れないことだ。そうになると、ボケ老人に早くなつてしまおうという意志が、どこかではたらくとさえ考えられないだろうか。

こんなときに、筆者がよく例に出す昔話がある。殿様の命令で六十歳になると老人は山に棄てられた。ところがある息子が自分の父親をかくまっている。殿様があるとき「灰で縄をなつて来い」と命令するが、誰もできずに困る。そのときにかくまわれていた父親が、縄を固くなつてから、それを焼くと灰の縄ができると教える。このことから殿様は老人の知恵に感心し、「うばすて」の慣習がやめになる、という話である。この話の面白いところは、「逆転の思想」が老人の知恵として見事に語られているところである。他の人々が灰で縄をなおうとしているとき、老人は「**I**」**こ**とを提案する。これを老人のことを考える際に用いてはどうか。老人は「社会の進歩についていけないから駄目だ」とか、「何もせずにいるので役に立たない」などと言うが、これを、**A** **老人は「進歩を妨害するので価値がある」とか「何もしないでいるのは素晴らしい」と考えてみてはどうか。これは立派な近代批判ではないだろうか。**

日本の教育を考えるとときも同様である。教える者と教えられる者が明確に分離され、どのような効率的な教え方をするかを教師は考え、子どもはいかに能率よく知識を吸収するかを学ぶ。ここにも上手な「**II**」**」**が望ましいという近代思想が入っている。その結果教師と生徒、親と子どもの関係が切れてしまい、子どもたちの心は**(b)** **荒**んでくる。現代の日本の教育には豊かな物語の復活が必要、と教育学者の佐藤学が主張している（『学びその死と再生』太郎次郎社、一九九五年）。筆者も同感である。寺子屋には物語があったのではなからうか。

現代人の病とも言うべき「関係性の喪失」を癒やすものとして、物語の重要性が浮かびあがってくる。物語は「**III**」

「」はたらしきをもっている。前述の「うばすて」の物語は、老人と社会とをⅢ作用をもっている。

物語と近代小説とを分ける、ひとつの指標として、前者は偶然を好むが後者はそれを好まない、という点がある。小説は「現実」を扱っているのであって、物語のような(c)絵空事は扱わないと考える。

筆者は心理療法家として、人間の生きている「現実」に触れることが多い。一般的には「処置なし」などという烙印を押されて来る人もある。その人たちが立ち上がっていくためには、大変な苦しみが必要である。治療者と二人で(d)クドウを続ける。しかし、その解決の重要な要素として「偶然」ということがあるのを認めざるを得ない。共に苦しんできた者にとつて、Bそれは「内的必然」とさえ呼びたいのが実感であるが、外から見ると「偶然」としか呼びようがない。「うまい」ことが起こる。不思議としか言いようがないし、また「当然」とも呼びたいことが起こる。

筆者が体験している、このようなことをそのまま「小説」として発表すると、「そんな非現実的な」とか、「偶然にうまくいくのは話にならない」などと言われて、否定されるだろう。しかし、それは「Ⅳ」なのである。このことを裏返すと、近代小説はほとんど「現実」を書いていないか、「現実」のごくごく限定された部分を記述している、ということになるかも知れない。Cこの頃、ノン・フィクションの方がよく読まれる原因のひとつは、こんなところにあるかも知れない。文学のことは詳しくないので、これ以上の深入りはしないが、現代人を相手として心理療法を行う上において、「物語」が非常に多くの(e)シサを与えてくれることは事実として、申し述べておきたい。それは、けつしてイ荒唐無稽ではない。

(河合隼雄『物語と人間』による)

問一 波線部(a)「タンテキ」、(b)「荒」、(c)「絵空事」、(d)「クトウ」、(e)「シサ」について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えよ。

問二 二重傍線部 ア「席捲した」、イ「荒唐無稽」の本文中における意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ア「席捲した」

- 1 支配した
- 2 驚かせた
- 3 抑制した
- 4 復活させた
- 5 混乱させた

イ「荒唐無稽」

- 1 曖昧なこと
- 2 無礼なこと
- 3 根拠のないこと
- 4 正しくないこと
- 5 愚かなこと

問三 空欄 にあてはまる語句として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

I 1 縄を灰でなう

4 灰をかためる

2 灰を縄にする

3 縄を灰にする

5 殿様をだます

II 1 批判

2 物語

3 命令

4 操作

5 逆転

III	1	吸収する	2	整理する	3	つなぐ	4	浄化する	5	分ける
-----	---	------	---	------	---	-----	---	------	---	-----

IV	1	小説	2	現実	3	必然	4	指標	5	偶然
----	---	----	---	----	---	----	---	----	---	----

問四 傍線部A「老人は「進歩を妨害するので価値がある」とか「何もしていないのは素晴らしい」と考えてみてはどうか。これは立派な近代批判ではないだろうか」とあるが、なぜそのように考えることが近代批判と言えるのか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 皮肉を交えた言い方が近代的な批判方法に似ているから。
- 2 近代社会の進歩や発展を密かに妨害することができるから。
- 3 近代社会で重視される効率や進歩を問い直すことになるから。
- 4 考え方を全く逆にすることが近代的な批判のあり方だから。
- 5 ありのままを認めるのは近代にふさわしい考え方だから。

問五 傍線部B「それは「内的必然」とさえ呼びたいのが実感である」とあるが筆者はなぜそのように感じるのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 心理療法家として本人とともに真剣に向き合って取り組んできたから。
- 2 快復が心理の改善によってのみもたらされることを知っているから。
- 3 心理療法の成果がほとんど偶然にしか現れないことを知っているから。
- 4 偶然にも見える快復は、人間の生きている現実であり、当然のことだから。
- 5 身体の快復は、大抵の場合、心の改善によってもたらされるものだから。

問六 傍線部C「この頃、ノン・フィクションの方がよく読まれる原因のひとつは、こんなところにあるかも知れない」とあるが、その原因の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 ノン・フィクションには、近代以前の物語に描かれるような非現実的な話が多く書かれていること。
- 2 小説にも現実には描かれているが、現実を記すノン・フィクションの方が非現実的で物語のようであること。
- 3 小説は現実を描写していても創作物であるが、ノン・フィクションは現実には起こったことの記録であること。
- 4 ノン・フィクションは、小説と違って現実を客観的に捉え、問題に法則を見いだして秩序づけていること。
- 5 近年の小説は、現実の描写が十分ではなく、近代以前の物語と同様に時代遅れになってしまっていること。

問七 本文の内容と合致しているものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 操作する側とされる側を分離すると人間関係の喪失を招いてしまうため、老人福祉や老人対策は不要である。
- 2 江戸時代以前には人が操作する側とされる側に分離されることがなかったため、心が荒んでしまう人はいなかった。
- 3 教える者と教えられる者の分離による人間関係の喪失は、物語を使った教育によって回避できるかもしれない。
- 4 豊かな物語を用いた教育は、人と人、人と社会の関係を癒やすだろうが、心理療法に役立つかどうかは疑問である。
- 5 近代社会は物事に法則を見いだして秩序づけてきたが、効率重視の老人対策や学校教育はそれには含まれない。

〈選択問題〉

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて的に向かふ。師の言はく、「初心の人、二つの矢を持つことアなれ。のちの矢を(a)頼みて、初めの矢に(b)なほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」と言ふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つを(c)おろかにイせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師Aこれを知る。この戒め、万事にわたるべし。

道を学する人、B夕べには朝あらむことを思ひ、朝には夕べあらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せむことを期す。いはんやC一刹那のうちにおいて懈怠の心あることを知らむや。なんぞ、ただ今の一念において、ただちにすることのはなはだ(d)かたき。

(『徒然草』による)

注1 道を学する人…仏の道を学ぶ人。

注2 懈怠…仏教語。なまけ怠ること。

問一 点線部(a)「頼みて」、(b)「なほざりの」、(d)「かたき」の本文中における意味として最も適当なものを、それぞ
れの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

(a) 「頼みて」

- 1 祈願して
- 2 あてにして
- 3 欲しがって
- 4 軽んじて
- 5 偏重して

(b) 「なほざりの」

- 1 無意識の
- 2 ぼんやりした
- 3 いい加減な
- 4 遠慮する
- 5 弱々しい

(d) 「かたき」

- 1 硬質である
- 2 頑固である
- 3 困難である
- 4 重要である
- 5 仇敵である

問二 点線部(c)「おろかに」の対義語として最も適当な語を本文中から抜き出して答えよ。

問三 波線部ア「なかれ」、イ「せ」の品詞名として適当なものを、次の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

- 1 動詞
- 2 形容詞
- 3 形容動詞
- 4 助動詞
- 5 助詞

問四 傍線部A「これ」はどのようなことを指すか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 初心の人は無意識のうちに師匠の前で緊張してしまうこと。
- 2 初心の人は無意識であっても気持ちが悪くならないこと。
- 3 初心の人は無意識であっても師匠を軽んじてしまうこと。
- 4 初心の人は故意に一本の矢だけを重視しようとする事。
- 5 初心の人は二本の矢に対して真剣に向き合っていること。

問五 傍線部B「夕べには朝あらんことを思ひ、朝には夕べあらんことを思ひて」とあるが、これはどのような気持ち

を言っているか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 命が長く続くことを祈る気持ち。
- 2 いい加減に過ぎたことを後悔する気持ち。
- 3 後の時間をあてにする気持ち。
- 4 残り時間が短いために焦る気持ち。
- 5 やりたいことが多すぎて迷う気持ち。

問六 傍線部C「一刹那のうちに懈怠の心あることを知らむや」とあるが、その解釈として最も適当なものを、次の中

から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 長い間、懈怠の心が続くことを知らないだろうか、いや知っているだろう。
- 2 長い間、懈怠の心が続くことを知っているだろうか、いや知らないだろう。
- 3 一瞬のうちに懈怠の心が起こることを知らないだろうか、いや知っているだろう。
- 4 一瞬のうちに懈怠の心が起こることを知っているだろうか、いや知らないだろう。
- 5 長時間のうちの一瞬だけに懈怠の心が存在することを知らないのだろうか。

問七 本文の内容と合致しているものを次の中から二つ選び、番号で答えよ。

- 1 師匠に会うときは懈怠の心を持たないように注意する必要がある。
- 2 どんなことであっても毎日少しずつ積み重ねることが大切である。
- 3 何事においても常に緊張感を持って取り組むことが大切である。
- 4 師匠は自分の弟子の個々の事情をよく理解しているものである。
- 5 繰り返し修行することが仏道を学ぶ人にとって最も重要なことである。
- 6 仏道を学ぶ人達が懈怠の心に気付いていないのは大した問題ではない。
- 7 弓道の師の戒めは、仏道を学ぶ人にも懈怠の心を意識させるものである。

問八 『徒然草』は誰の作品か。その作者名を次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1 紀貫之

2 松尾芭蕉

3 兼好法師

4 鴨長明

5 信濃前司行長